

人間は自分が考えているような人間になる!! アール・ナイチンゲール

しかし、今後何世紀もの間、世界の知識と喜びの源となるのは、やはり本なのである。私の知識や娯楽は、すべて活字を読むことから始まった。初めに本ありきなのである。

私は一七年もの間、ブッダの言葉、老子の著作、新約聖書、エマースンの作品など、無数の本を読んできた。

しかし、探し求めていた言葉が脳裏にひらめいたのは、ほんの一瞬の出来事であった。

「人間は自分が考えているような人間になる」(We become what we think about) ——この言葉が、私を驚きで打ち震わせた真理なのである。

この本をあなたが読んでいる今こそ、「未来の自分の構想は何か」を自問するうってつけの機会である。

自分が何を考えているのかわからないなら、人生も迷い多きものとなるだろう。未来への構想がしっかりしているかどうかで、人間の運命が決まってしまうのである。

ところで、あなたが才能を発揮できる分野はなんだろう。また、その才能で何人の人を楽しませることができるだろう。一〇〇人、一〇〇〇人、それとも一〇〇万人か? 奉仕できる人の数によっては、あなたも莫大な富を有することが可能である。

貧富の差が出てくる理由はここにある。すなわち、金持ちとは、他人により優れた価値のある——需要のある——サービスを提供できる人のことなのである。

ピラミッドの底辺にいる人々は、(身分が低いという意味ではない) 従事している人数が多く、才能や熟練がそれほど必要とされない手荷物運搬人、ウェイトレス、タクシー運転手、店員、警備員、肉体労働などの職に就いている。

仮に病気になってしまっても、欠員補充は簡単にできる。新しく補充された人間は、最初のころ、うまく仕事ができないかもしれないが、慣れてくればこの問題も解決する。このような職種をこなせる人間は数多くいるし、どこにでもある仕事である。すぐに補充がきくし、賃金も安い。誰でもできる仕事だから、給料も安いのである。

根気強く、時間をかけて考えていけば、ジグソーパズルが少しずつ完成していくように、願望や目標も見えてくるようになる。考えること、それは、「人生の意味を知るための旅」なのである。

願望や目標は、人間の潜在意識にはっきりとした影響を与えるものである。それに、どんなに否定しようが、だれもが願望や目標を持っているのである。

あなたが、実現したいと思っているものは、すべて願望・目標なのである。だれもが自分に願望・目標という衣服を身につけているのだ。

一二歳のころ、成功の秘訣について尋ねた大人たちは、私が一五歳になってもなんの進歩もしていなかった。彼らの思考は停止したままだったのである。ごく単純な刺激にだけ反応して生きていただけなのだ。腹がすけば、食べ物はなにかとあたりをうろつき回る、といった生活だったのである。

睡眠、食事、セックスが人生のすべてなのだ。 暇なときには、別段たいしたものでもないことに大騒ぎをしていた。ジャック・ペニー、ファイバー・マージー、モーリーのラジオ番組を開いて大笑いしていた。やっていることといえば、ひざをたたか、首を振るか、笑っているかのどれかであり、これ以外は起きていてもボーッとしているだけなのだ。

一九八〇年代初期の企業合理化の嵐が吹き荒れているとき、「三〇年間会社に尽くしてきたのに、このとおりお払い箱です」といった言葉をよく耳にしたものである。

こういう言葉を聞くと、クビになった人間がまるで会社の犠牲者のように思えてくる。しかし、会社は職種や時間に基づいて給料を払っていたのだし、好きなことを実現しようと思えば実現できるだけの給与は与えていたのである。別に不正なことをしていたわけではない。

思考は、人間に自主性と自由を与えるものであり、今までとは違う世界や生き方を教えてくれるものである。

よい考えとは、魔法のように神秘的であり、魅力的なものなのである。三五年ないしは四〇年の間、必死にしがみついていた仕事より、**退職後に収入が大幅に増加する人がいる理由もここに**あるのだ。

年金をもらい、もう食べるのに困らなくなると、**今まであきらめていた願望や目標、あるいは考えを**実行しようという**気力が**起きてくる。本来起きてこないのがおかしい。そして思っていたが吉日だ。やりたいことは、いつやってもかまわない。しかし、必ず「三〇年前にやっておくべきだった。そうすれば、もっと違った人生が送れたのに。きつとずっと楽しい人生だったろうに」と後悔する人が出てくるものである。

生きているかぎり、安定などというものはないのだ。

男女は、ともに助け合いながら生きていく生き物であり、自分にふさわしい人が現れた場合、人生はまたとない喜びとなる。二人にとって人生は、豊かで意義あるものになるのである。男女は、あらゆる面で奉仕し合うものである。

確かに、人間は一人ひとり独立してはいるが、男女がいっしょになると、一つの単位となり、報酬も二人の努力の成果から生まれるようになる。だれが金を稼いでくるかなど、問題にすべきではない。

夫または妻がどのような手段で稼いだものでも、それは二人の共有の財産なのである。男女の生産能力は、ひとえに、お互いの仲、親密さによって決まるものである。男女は、助け合いながら生きている。だから、どちらが多く稼いだかは、問題にすべきではないのだ。

「妻は自分に、ふさわしい人物か」などと考える前に、「自分は妻に、ふさわしい人間か」と考えてみよう。お互いに違った面があるから価値があるのだ。

二人で「お互い何をしてほしいのか」考えてみるのもよいだろう。そうすれば、自分がどんな奉仕をしなくてはならないのかわかってくる。

私たちにはフロ

リダ州の南西部にも家がある。そこもきれいで自然の恵みの多い土地柄で、ボートをこいだり、釣りをしたり、近くの海で潜ったりすることもできる。私たち二人はほんとうに休暇を味わっているのだ。

「私の番組のスポンサーになってください。そうしたらこの本を何千部も売ってみせましょう」と私は切り出したのである。

「ラジオはやってみたよ。だめだったね」そう答えが返ってきた。

「同じラジオでも私のはちょっと違いますよ。この本はもちろん店のよい宣伝になりますよ」

「じゃあ、こうしよう」と彼は言った。「売ってくれたら一冊につき四〇セント支払おうじゃないか」

私は委託販売をするつもりはなく、一年、半年、なんなら三カ月でもいいから契約を取り交わすつもりだったが「じゃ、取引は成立です」と言った。

翌週からしばらくの間、本の注文が殺到した。『風と共に去りぬ』の出版以来、これほど次々と売れているのを老クローチは目にしたことがなかった。一部四〇セントでも何千と売れたので、小切手はかなりの額となった。

そして、クローチは小切手を書きながら、話に乗ろうと言ってきたのである。初めは小額だったが、すぐに増やしてくれた。私は彼にこの番組がどれだけ宣伝効果があったかを手紙に書いてもらった。以後、この手紙は、実績を証明する道具となり、スポンサーになりたいと言ってくる人が増え始めた。

私の番組も、スポンサーにとってついに魅力あるものとなりだしたのである。初めは一日一五分だった放送が三〇分、一時間と延び、他にも午後の一時間と朝の三〇分の番組も担当するようになった。その上テレビからも誘いがかかり、三〇分番組を持つようにもなったのである。どの番組にもかなりのスポンサーがついてくれた。

番組では自分が面白いと思ったことについて話した。本のこと、哲学のこと、人物、事件など、私が面白いと感じられることだけを話すようにした。私が興味を持つことなら、ラジオを聞いている人たちもたいてい面白いと感じてくれるはずだ、と思っていた。実際、私のねらいどおりだったのである。

かねがね私は、放送界が視聴者のニーズを探り出そうとしないのは、恥ずかしい事だと感じていた。ただニュースを繰り返したり、天気予報や音楽を流すだけで事足れりとするのは、とんで

もないことである。ラジオでも人々を立派に啓発することができるはずである。ただ一つ実行すべきことは、「つねに面白い情報を提供していくこと」だけである。「もう少しの辛抱だ」と、たえず自分に言い聞かせていたからうまくいったのである。粘り強さは成功への必須要件だ。

世の中には、何か新しいことをやってみようと思って難しい問題に手をつけるが、どこへ行ってもはねつけられ、結局元に戻ってしまうような人たちがたくさんいる。

もっと驚いてしまうのは、自分で事業を意気込んで始めるのはいいが、**失敗してしまうと二度とチャレンジしようとはしない人たちがほとんど**である、ということだ。

事業を成功させるというのは、スキーを習ったりピアノを弾いたりするより、ずっと難しいに決まっているのではないか。初めは誰だって失敗するものだ（それも勉強の一つである）。しかしあきらめる理由などない。

私たちは失敗を繰り返して、大事なことを学んでいくのである。**辛抱強くあれ、粘り強くあれ。それが成功するか否かの分かれ目**なのである。

「辛抱強くあれ」という言葉は、人生における良質で健全なもののほとんどに当てはめることができる。

「健全な自己イメージの四段階」

- 一、他人を許すこと。
- 二、自分を許すこと。
- 三、自分の一番の**長所に目を向ける**こと——不満よりも自信を選択すること。
- 四、自己の生き方を守ること——自分のリズムとペースで進むこと。他人が何をしているか気にしないこと。

願望や目標を持った人たちにとって、アメリカや日本はやはり楽園である。なぜなら**アメリカや日本では働けば働くほどいくらかでも稼ぐことができる**からである。収入を決めるものは、どれだけの客の要求に応えることができるか、あるいは応えるものが創り出せるか、ただそれだけである。

だから、莫大な収入を得ようと思ったら、単なる自営業者になったところで道は開けないのだ。この目標は本物の起業家にこそ実現できるのである。

人間は年をとるにつれて幸福になる。三〇歳のときよりも四〇歳のときよりも、五〇歳のときのほうがずっと楽しい。

何よりこの私自身がそうだ。六一歳のときほど人生最良の年はなかった。このとき私はダイアナにめぐり合い、以後彼女は私の人生を喜びと輝きに満ちたものに変えてくれたのだ。

多くのアメリカ人と同様、私も結婚生活の失敗を繰り返してきた。一度日はなんとか一八年続いたし、二度目の結婚のときもどうにか一四年持ちこたえた。

だから私は決して忍耐力のない人間なのではない。けれども二度目の破綻のあと、この人だと思えるような人と出会うのでなければ、もう二度と結婚はすまい、と心に誓ったのである。こうして七年の歳月が過ぎた。それだけのときが必要だったのだ。

ダイアナと一緒にってからもう五年になるが、今はまったく素晴らしい毎日の連続である。

同

じように、成功もどれほど多くの人間の中で生み出されたものだとしても、**仕事、家庭、収入**に関するかぎり個々人の問題となる。

人間にはこの三つの領域が必要である。

そして収入には、異なった二つの重要なものがあることを忘れてはいけない。1つは人々に奉仕することによって得た金であるということ。もう一つ大切なのは、自分が精いっぱい力を尽くしたことによって得られる**精神的な報酬**であるということだ。この精神的な報酬は家庭からも、仕事からも得られるし、その結果、今の自分を認め、受け容れる自尊心というものが育まれていくのである。